

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：54502

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520487

研究課題名(和文) 日本手話の文法関係表示について

研究課題名(英文) Subject/Object Marking Auxiliaries in Japanese Sign Language

研究代表者

今里 典子 (Imazato, Noriko)

神戸市立工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：90259903

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：手話言語の主語/目的語標示を行う助動詞(AUX1 や AUX2)は、Smith(1990)が、台湾手話でその存在を指摘し、Fischer(1996)が日本手話東日本方言にも AUX1 のみ存在する事を認めた。AUX2 が動詞「見る」から派生した事は、Smith が示したが、AUX1 の生成過程は不明であった。Sapountzaki(2012)らの「代名詞連続からの派生」仮定も証拠が不十分である。本論では、日本手話西日本方言には AUX1 と AUX2 が存在し、AUX1 は「見る」 AUX2 AUX1 の順に文法化により生成された」という仮説を提案し、その妥当性を検証した。

研究成果の概要(英文)：Subject/object marking auxiliaries such as AUX1 and AUX2 were first identified by Smith (1990) in Taiwan Sign Language (TSL). Later, Fischer (1996) also recognized AUX1 in JSL's eastern dialect (JSL-e). Smith's research proves that AUX2 is derived from the verb SEE because of their similarity in phonetic configuration. However, close observations of these two sign languages by Smith and Fischer do not elucidate the developmental process of AUX1. Sapountzaki's (2012) comparative study of 11 sign languages hypothesizes that AUX1 is "a smoothed series of indexical pronouns," but his argument is not supported by either TSL or JSL-e data. Observing newly collected data from the JSL's western dialect (JSL-w), which has both AUX1 and AUX2, our analysis proposes an alternative hypothesis that "AUX1 was created as the result of grammaticalization of the verb SEE (MIRU) by way of AUX2." Our research also investigates the adequacy of the new hypothesis.

研究分野：言語学

キーワード：主語目的語標示 日本手話 文法化 助動詞 連続動詞構文 類型論 日本手話西日本方言 認知言語学

### 1. 研究開始当初の背景

日本固有の第3の言語であり、聾者の第1言語である日本手話(JSL)において、主語と目的語の文法関係を表す手段には、一致動詞の使用の他に、体の位置/体の向き、文末の指差しによる代名詞コピー、助動詞の使用など、いくつかの手段が存在し、時に共起もできることが指摘され知られている。①~③のうち、特に の手法は、世界の他の多くの手話言語でも広く観察されるが、の助動詞は、限定的な手話言語のみで観察される。例えばJSLの他には、日本手話と語源的に関係のある台湾手話(TSL)(Smith,1990)、さらにJSLとは語源的に関連のない手話言語では、例えばオランダ手話(Bos,1994)やインドパキスタン手話など、これらを含め11言語の存在が報告されている(Sapountzaky 2012)。

文法関係標示は、非常に基本的な文法項目であり、かつJSLでは①~④のすべてを1つの言語内で観察できるにもかかわらず、その詳細な記述や十分な解説がなされてきた訳ではなかった。

Smith(1990)は、TSLにAUX1,AUX2,AUX11の3つの文法関係表示の助動詞が存在すると指摘し、Fischer(1996)は、JSLの、主に東日本方言(JSL-e)を分析し、TSLで観察された3種類の中ではAUX1一つだけが存在していると主張している。そしてこれはクリティックではなく派生であり、以前Torigoe(1994)が主張したように、「文末に現れる代名詞コピーの指差しをなめらかに連続させたもの」であるという仮説では説明できないことを丁寧に論証している。しかしこの文法成立に関する新たな仮説を提案する事はなく、AUX1はダミー経路移動(a 'dummy path movement')であると主張するにとどまっている。この「ダミー経路移動」が本当にあるのかどうかも十分に検証されたとは言えないし、仮にあるとしても、それがなぜどのようにして助動詞として使用されるようになったのかについても全く明らかにしていない。またその後、他の研究者による検証も証明も反論もされておらず、課題として残ったままである。 の文法をもつことが明らかになっている数少ない言語のひとつとして、JSLにおける実証的な研究が待たれている。

### 2. 研究の目的

JSLは主語/目的語の文法関係を表す助動詞を持つ数少ない言語の一つであるにもかかわらず、この言語を対象として正面から捉えた研究はほとんどないのが現状である。

従って、まずこれら複数の標示方法の棲み分けがどうなっているのかを明らかにする必要がある。そして特に、いくつかの手話言語にだけ見られる助動詞はどのようなプロセスで発生してきたのか、また「ダミー経路移動」の有無と、もしあるとするならばその

理由、さらに人間の認知との関連など、多くの点が明らかでなく、実証的に検証もされていない。主語/目的語の文法関係表示機能全体を明らかにした上で、特に の助動詞にかかわるこれらの謎に迫り、明らかにすることを目的とする。

また文法関係を表す助動詞の存在を指摘されている言語のうち、TSLとJSL(-e)は語源的に関連があることが指摘されている。つまりTSL,JSLと名前は変わるが、これらは1つの言語のバリエーションであると考えられる事が可能である。そしてもしそうであれば、JSLに見られる(地域、また聾学校毎における)他のバリエーションの中には、Fischerが観察したJSL-eでは見られなかった用法や例文が観察される可能性も否定できない。またFischer(1996)の研究では、JSL-eについても限られた数のデータしか扱っていないので、JSLの他のバリエーションについても数多くのデータを対象に検証することも必要である。従って本研究は、JSL-e以外のバリエーションの多くのデータを追加して、これらを対象に分析を進める必要がある。

最後に、副次的な目的として、JSLの基本的な文法を記述しそれを公開することを急ぐ必要がある。JSL研究の歴史が短いこともあって、JSLの文法記述は未だ十分でない。しかしその一方で、現在日本各地で手話言語法の成立が相次いでいる。日本社会において今後ますます「JSLは日本固有の独立した言語」であるという認識が広まり、それと同時に、聾者対象にJSLによる教育が必要になり、また広く一般対象にもJSLを教育する必要性が高まってくる事が確実になっている。本研究では、このような近い将来の社会のニーズに答えうる研究成果を積み上げること、また大切な目的の一つとして数えている。

### 3. 研究の方法

本研究では、JSLのうち西日本方言(JSL-w)を新たに分析対象言語に加える。西日本(関西地区)のデフ・ファミリーに生まれ、この地域で育ち、地域の聾学校を経験し、かつ現在もその言語を日常的に使っているネイティブ・サイナーに依頼し、4つの文法関係標示の方法について、数多くの文例を撮影する。サイナーの詳細な出身地域、手話使用頻度等によってもデータを区別し比較できるよう、メタデータも整理する。

撮影したデータは、サイナーの協力を得ながら分析し、まずは4つの文法関係標示方法を記述し、それらの共起と棲み分けの関係を明らかにする。

次にJSLに特徴的に見られる文法関係標示機能をもつ助動詞を特に詳細に分析する。この助動詞がどのような動詞と共起が出来る(または出来ない)のか、共起できる場合には、助動詞の形、動き、位置、さらにそれに付随する視線や顔つき、体の向きや頭の位置などの非手指表現、がどのように変化する(の

かしない)のか、また意味は変化するのか、もし変化するのならばどのように変わるのか、さらに助動詞と文末指示代名詞との共起関係がどのような場合に可能なのか、制限はあるのか等について特に注意して観察・分析する。

さらに、他の構文(例えば移動構文)との関連を探り、世界の他の手話言語のデータとも比較検討する。

また言語類型論の視点から、音声言語における類似の文法の表現との比較から、その相違を探る。

最後に助動詞の成立のシステムに関してはその背景にある人間の認知についても考察する。

#### 4. 研究成果

手話言語の主語/目的語標示を行う助動詞について、Fischer(1996)は、JSL-eにAUX1のみ存在すると主張している。TSLのAUX2が動詞「見る」から派生した事は、2つの語の形状の類似性からSmithが示し、明らかだが、どちらの研究者もTSLにもJSL-eにも共通して存在するAUX1がどのように生成したのか、その過程は明らかにしていなかった。Sapountzaki(2012)らは、AUX1と指差し手形の形状の類似から「代名詞の連続」から派生したと仮定した。

本研究では、JSL-wのネイティブサイナーのデータを観察し分析し、以下の事を明らかにした。まず、

##### (1) JSL-wの文法関係標示助動詞

TSLで観察される文法関係標示の助動詞AUX1、AUX2、AUX11のうち、JSL-wにはAUX11はないが、AUX1とAUX2の2つが存在することをまず確認した。

##### (2) 文法関係標示の文法要素の棲み分け

文法関係標示ができる文法要素の共起と棲み分けを解明した。の一致動詞と体の位置/向き、および代名詞コピーは共起できる。との助動詞は通常共起できない。他方はと共起が自由である。つまり一致動詞と文法関係標示助動詞が排他的な関係にある。

##### (3) 助動詞と動詞の共起

文法関係標示の助動詞は、一致動詞(移動動詞も含む)とは共起せず、専ら非一致動詞で、かつ参与者を2つ含む場合に共起できる。例えば一致動詞である「教える」や「来る」等とは共起せず、また非一致動詞でも参与者が1つだけの「喜ぶ」「考える」等とは共起しないが、「好む」「知る」等と共起することが可能である。また共起する場合、JSL-eでは助動詞は動詞に後置される傾向があると報告されていたが、JSL-wの場合は、TSLと同様に、助動詞が動詞に前置される傾向にあることも実証的に示した。

JSL-wの分析によって、ここまでで明らかになったことから、すでに提案されていたAUX1の成り立ちに言及した以下の(4)(5)の2つ

の仮説を否定した。

##### (4) 「代名詞連続」仮説の否定

SapountzakiらのAUX1は「代名詞の連続」から成立したという仮説は、主に次の二つの理由から否定した。まず、SVO語順のJSL-wにおいて、AUX1の代わりに、主語、目的語の順に指差し手形で代名詞を連続して表現しても、主語/目的語を明示した正しい文を作る事ができないという現象があげられる。次にJSL-wのAUX1の手形は移動を始める前に主語を指し示す事は絶対に出来ず、初めから目的語の方向に向けられていなければならないという現象が観察される。

##### (5) 「代名詞コピー」仮説の否定

Fischerが論証したのと同じ手法で、JSL-wのデータを使ってもTorigoeの文末代名詞コピー仮説は現象を説明しないことを説明した。

そして、以下の新たな仮説を提案した。

##### (6) AUX1成り立ち仮説

AUX1は動詞「見る」がAUX2経由で文法化して出来た統語要素である。

「見る」「AUX2」「AUX1」

根拠として、

##### (7) 文法化の証拠

手話言語の音韻(手形、手形の位置、手形の動き、手形の方向)は、「見る」から「AUX1」へ、この順に、手形の伸ばしている指の数が2本から1本に減り、手形移動の開始位置は目の位置から胸の前のデフォルトの位置に下がり、手の動きは、比較的長い対象への弧を描くような動きから、軽く短い水平の動きに変わる。また手の表現に伴って現れる非手指表現からも、頭の前傾と対象への視線の固定が義務でなくなる。このように音韻/形態の簡素化が観察できる、またこれにあわせて、「見る」という「視覚による認識」の意味が次第に薄れ意味の漂白が観察される。これらの現象と平行して、「見る」という完全な「動詞」から、AUX2のような時として動詞としても助動詞としても解釈される過程を経て、最終的にはAUX1のような完全な助動詞となっていることを実証的に明らかにした。

この新たな仮説は、次のような特別用法の存在によっても立証される。

##### (8) AUX1の特別用法

AUX1が、特定の状況(目上の人が目下の人を小さい頃から知っているというコンテキスト)で使用される特別用法があることを指摘した。そしてこの時、手形はAUX1の形を保持していて形態上AUX1であるとわかるが、手形の位置と移動のみ「見る」の時と同じように目の位置から長めの動きになる。この特別用法においてはAUX1にも「見る」という意味が現れる。この現象は、文法化の過程を手形の位置・動きの部分のみ逆にさかのぼることによって、本動詞の意味を取り戻す現象であると考えられる。このような現象により、仮説の妥当性を検証した。

AUX1が動詞「見る」からの文法化の過程に

よって成立したとするならば、次のことが考えられる。

JSL(およびTSL)において動詞「見る」は、人差し指と中指をそろえてのばした手形を、指先を前方に向けたままサイナーの目の位置から見る対象の位置に向かって大きく動かすことで表現される。これはサイナーの両目から放たれた視線が対象に向かって移動する様子を表現したものであることは疑いがない。つまりJSLやTSLにおいて「見る」という動詞はもともと視線の移動を表した移動動詞であり、同時に対象を知覚する主語と知覚される目的語を指示することのできる一致動詞でもあるといえる。この事実は、Fischerが指摘したAUX1が「ダミー経路移動」であるという考えが妥当であることを示唆するだけでなく、なぜAUX1が「経路移動」と関係があるのか、その理由とシステムをよく説明することができるという利点がある。

最後に、文法化の背景にある認知について考えるべき点がある。音声、手話の別なく、すべての言語を類型論の視点から考えると、一定の基本的な語が、言語の系統とは関係なく、一定の機能を持つ統語要素へ文法化する傾向があるかどうかという問題は、Heine & Kuteba (2002)などの研究で扱われている。彼らの音声言語を対象とした研究では、他の動詞と比べて、「見る」にあたる動詞が文法化する例が皆無ではないが、特にたくさんあがっているという訳ではない。仮に手話言語において、「見る」という動詞が文法化することが他の手話言語でも見られるとするならば、手話と「見る」という行為についての関係について考慮する必要があるかもしれない。手話言語のサイナーにとって、「見る」ということは音声言語の話者とは比較にならないほど大きな意味を持つ。このような意味や、手話言語サイナーの物事の認識過程は、文法化の事実と関係があるかもしれない。ただしこの問題に関しては、さらに他の手話言語や、音声言語において、特定の動詞の文法化の可能性について十分なデータがそろえる必要がある。今後の研究課題である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

今里典子 2014 「日本手話における主語/目的語標示の助動詞について」, 言語研究 146号, pp31-50

〔学会発表〕(計 1 件)

Yo Matsumoto, Yo Matsumoto, Kimi Akita, Fabiana Andreani, Kiyoko Eguchi, Noriko Imazato, Kazuhiko Kawachi, Ikuko Matsuse, Takahiro Morita, Naonori Nagaya, Kiyoko Takahashi, Ryosuke Takahashi, & Yuko Yoshinari 2013 “Crosslinguistic tendencies in the intralinguistic variations of motion descriptions: An

experimental study of manner, path, & deixis”, 12th International Cognitive Linguistics Conference, University of Alberta in Edmonton, (Alberta, Canada)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕 該当なし

〔その他〕 該当なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

今里典子 (IMAZATO NORIKO)

神戸市立工業高等専門学校・一般科・教授

研究者番号: 90259903

(2) 研究分担者 該当なし

(3) 連携研究者 該当なし